



スピカ



寒竹泉美

スピカ

寒竹
泉美

目が覚めたとき、自分が何者で、今どこにいるのかを思い出せなかつた。よほど深く眠つていたのだろう。足のつかない水の中にいるような不安な気持で、辺りを見回す。ここは列車の中だつた。窓の外には、まだ水の張られていない田んぼが広がり、空は透明な水色で、日差しがきらきらとまぶしかつた。それらが通り過ぎて、あつという間にわたしの視界から消えた。トンネルに入ると、窓はわたしの顔を映した。美しくも醜くもない。どこにでもいそうな容姿の、特徴のない一人の若い女。間もなく岡山です、というアナウンス

で、そうだ、岡山に来たのだ、とわたしは、寝ぼけた自分に言い聞かせるように、つぶやいた。

予定より二時間も早く、待ち合わせ場所の鴨方駅に到着してしまった。一人で遠出することに慣れていないから、乗り遅れてもいいように早め早めに行動したせいだ。東京から新幹線で三時間半。岡山駅でのぞみからこだまに乗り換え、新倉敷から在来線で三十分。目指した場所は、拍子抜けするほど近かつた。でも、ここに来るまで何年もかかった気がした。体は到着しているけれど、まだ心が追いついていない。

わたしは駅舎を出て、ロータリーに待機しているタクシーを覗きこむ。

「あの、天文台に行きたいんですけど」

どうぞ、と気軽に請け負う運転手に不安を覚えて、

「国立天文台岡山天体物理観測所、です」

と、言い直した。大丈夫だというように運転手が大きくうなづいた。運転手は、自信たっぷりの様子で、車を発進させる。道を説明する必要がなかつたことに安堵して、わたしはシートに体を沈め、ほっと息を吐いた。

わたしが到着する時間に合わせて車で降りてきて、駅まで迎えに行く、と、瀬良敏和はメールに書いてくれていた。でも、取材に押しかけて仕事の邪魔をしてしまうだけでも申し訳ないので、わざわざ迎えに来てもらつたりしたらどんな顔をして会えばいいのか分からぬ。タクシーで行けるのなら、そのほうがよかつた。天文台には、天文博物館という一般の人向けの施設も隣接されているらしい。上がってしまえば時間は十分つぶせるし、心の準備もできるだろう。

車は、鬱蒼としげる木々の中に入つていき、急な山

道をくねくねと登りはじめた。車酔いしないように、わたしさ運転手の肩越しに道の先を見つめる。

「どこから来られたんですか？」

「東京です」

「遠いところから、よう、おいでんさつたな」

岡山の方言で運転手は言つた。孫を迎える祖父母のような親しい響きだつた。

「ドアのところに、うちの会社の電話番号書いてあるでしよう。帰るときはそこに電話してください」

カバンから手帳を取り出そうとした途端、体が大き

く右に揺さぶられた。酔わないよう気を付けていたのに、さつそく胸がむかむかして、文字を書くどころじやなくなつた。番号を書きとめるのはあきらめて、ふたたびシートに体を沈める。瀬良敏和に会えさえすれば、帰りはきっと何とかなる。たとえ送ってくれなくとも、タクシーの電話番号くらいは教えてくれるだろう。

「あ、失礼。お客様、もしかして、研究者の方でしたか」

と言つて、運転手は笑つた。

「お若いから、てつきり一般の見学者かと思いました。
じゃあ、これから数日間は山籠もりですね。天気もい
いし、いいデータが取れるといいですね」

わたしがメモを取らないので、運転手は勘違いした
のだろう。でも、車酔いがいよいよひどくなつて訂正
する元気がなかつた。そつと窓を開ける。

「この天文台ができた時、私はまだ子供でよく分から
なかつたんですが、親父や大人たちはずいぶん自慢し
てましたよ。岡山は天体観測に適しているから選ばれ
て、東洋一の望遠鏡が設置されたんだって。何度も聞

かされました」

「晴れの国、岡山。晴天率が高いらしいですね」

岡山や天文台について調べていたときに目にした岡山県のキャッチフレーズだ。

「ずっとここに住んでたら、そんなこと言われてもぴんときませんけどね」

国立天文台岡山天体物理観測所と刻まれたゲートが見えた。でもまだ天文台らしきものは見えない。車はさらに山道を登つっていく。

「でも、東洋一だったのは五十年前の話で、今はもつ

とすごいのがハワイにできて、みんなそつちに行つちやうんでしょう」

「そもそも限らないですよ。確かに、望遠鏡の規模としては、日本一というわけではなくなつてしまいましてが、国内にある望遠鏡として、まだまだ果たすべき役割があります。それに、岡山で長年培ってきた技術や経験というものもありますから」

するすると言葉が出てきた。岡山天文台に勤める研究員の瀬良が新聞のインタビュー記事で語っていた言葉の受け売りだった。

「そんなもんですかね」

まるで自分がほめられたみたいに運転手は笑つた。
車が上がりきると、視界が開けた。コンクリートの
駐車場には、数台の車が止まっているだけで、がらん
としている。

「ここが一般の見学者用の駐車場で、研究者用のゲー
トは、まだ上になります」

「あ、ここでいいです」

上に車を回そうとしている運転手を慌てて止めた。

「まだ時間が早いので、博物館のほうも見学していき

ます

「そうですか」

料金を払うと運転手は、慣れた様子で領収書を発行してくれた。そして、観測、がんばってくださいねと言ふと、ドアを閉めた。

深呼吸をする。体の中に、新鮮な空気が入ってきて、むかむかしていた胸が少し楽になる。眼下には町が広がつて、緑の山々が見えた。ずいぶん高いところまで登ってきたらしい。

博物館に続く階段を上がっていくと、丘の頂上に、

カツプケーキみたいな形の建物が見えた。あの丸い屋根の中には巨大な望遠鏡がおさまっているのだ。そして、この望遠鏡を使って瀬良敏和——わたしと血のつながった本当の父親——は研究をしているのだ。

一緒に暮らしている父とわたしが、血のつながりがないということを知らされたのは十七歳、高校二年生のときだつた。修学旅行でオーストラリアに行くことになり、パスポートを取得する必要があつたのがきっかけだつた。

「こせきとうほんつてのがいるんだって」と、わたしが言うと、

「そう、じやあ、お母さんが取ってきてあげる」と、母は気軽に請け負ってくれた。が、しばらくして母はそわそわしてわたしの顔をうかがうようになり、ある日の晩御飯のあとに難しい顔をして、一枚の紙をうやうやしくわたしに差し出した。

「今まで隠していてごめん」

戸籍謄本というものを、わたしはそのとき初めて見た。一枚の紙切れに真珠というわたしの名前があり、

母・井上沙織、養父・井上隆、そして、父のところには瀬良敏和というわたしの知らない名前が書いてあつた。

冗談でしょ、と、わたしは思つた。

わたしの父は同級生のお父さんたちと比べたら少々年を取つていて、髪が薄くて太つていて、容姿の面ではあんまり自慢できるところがなかつたけれど、誰もが名前を知つている会社の重役を務めていて、部下からの人望も厚く、社会的にはできる男であるらしかつた。母は母で、そんな父にべつたり甘えていて、ふた

りは喧嘩をすることもなく、いつも仲睦まじかった。本当のお父さんが別にいるなんて、そんなこと、一度も考えたこともなかつた。

紙から視線を上げると、父も母もわたしの反応を真剣な面持ちでうかがつていた。泣き出しても暴れだしでも、覚悟はできているという顔だつた。そんなふうに待たれると、反応する気も失せてしまう。何より現実味がなかつた。そもそも、わたしは、自分がショックなのかどうかもよく分からなかつた。

ふたりの熱い視線に気圧され、何かこの件について

言わねばと焦る気持になつて、

「この人、どんな人？」

と、紙を指さしてきいた。そんなぶつきらぼうな言い方になつたのは、父の前で、ほかの人をお父さんと呼ぶのはためらわれたからだ。

「天文学者」

と、母は言つた。予想外の返答で、思考が停止した。

「で、今、どこにいるの？」

「それが分からぬのよ。どこか海外の研究所だと思
うけれど」

母は途方にくれたように大きなため息をついた。わたしがじつと見つめていると、

「やだ、真珠。疑ってるの？ 別に隠しているわけじゃないくて、本当に分からなくなっちゃったのよ」

と、付け加えて大きく首を振った。ふうん、と、わたしは言つた。母のリアクションが演技かかっていて、いかにも嘘くさかった。

「じゃあ、いいや」

わたしはそれで話を打ち切つた。十七歳のわたしにとつて、世界のどこかにいる天文学者の本当のお父さ

んよりも、修学旅行のグループ分けや、部活のレギュラー争いや、大学受験のほうが大事だつた。それに、父と母がふたりで息をつめて見守つている中で、取り乱したりするのは何だかしやくだと思つた。

それでわたしは、決定的に永久的に、本当の父が別にいることについて、ショックを表明するタイミングを逸してしまつたのだつた。

修学旅行先のオーストラリアで、夜空を見上げているときにふいに思い出し、本当のお父さんは別の人だ

つた事件を真由に話してみたら、

「天文学者だなんて、かつこいいじやん」

と、真由はひとりで盛り上がった。

「えー、そうかな」

「かつこいいよ。巨大なアンテナ操作して宇宙と交信
してるんでしよう。あ、真珠が数学とか物理とか得意
なのってお父さんの遺伝じやないの？　いいなあ。本
当のお父さん。なんかピンチのときに助けてくれそう
じやん」

「ピンチってどんな？」

「エイリアンにさらわれそうになつたときとか」

映画の見過ぎだ。他人事だと思つて勝手なことを言う。けれど、わたしもどこか他人事だつた。紙切れに書かれた活字の名前を見ただけで、実感なんて湧かない。写真一枚残つていないので。その上、異国之地で夜空を見上げて話していることが、現実感のなさに追い打ちをかける。

「真珠は、本当のお父さんに会いたい？」

「分かんない」

「分かんない、か。相変わらずクールだよね」

わたしはクールなのだろうか。ほかの女の子だつたら、こんなとき、どんなふうに振る舞うのだろう。ぐれたり非行に走つたり、育ててくれた父に、本当のお父さんじやないくせに、と泣き叫んだりするのだろうか。真由ならどうする、ときいてみたかったのに、いつの間にか、昨夜誰かが誰かに告白したらしいという話が始まつて、自分はいつ告白するかという真由にとつての重大問題に移つていた。わたしはその話に相槌を打つたり、適当にたきつけたりなめたりしながら、分かんない、という自分の発言について考え続けてい

た。

わたしは本当のお父さんに会いたいのだろうか。会いたくないのだろうか。

もし、向こうがわたしに会いたいと思つていたら会いたいけれど、そうじやなかつたら会いたくない。そんな結論にたどりついた途端、内臓がぎゅうと締め付けられるような苦しさに襲われた。圧倒的な星空の中に、体が浮かび上がつて飲まれるような気がした。地面がなくなつて、手足が切り離されて消えてしまいそうな感覺。

「南十字星分かりましたか？ 分からない人は手をあげて呼んでくださいね」

理科教師の甲高い声が、わたしを現実に引き戻した。周りにはジャージ姿の同級生たちがたくさんいる。わたしは何だかほつとして、自分の手のひらを見つめ、それからもう一度夜空を見上げた。

あれから八年が経った。今、目の前に広がっているのは南半球の夜空ではなく、人工的に作られた日本の春の夜空だ。博物館に入つてみたら、プラネタリウム

が始まりますと案内されて、中に入ったのだ。

——ひしやくの形をした北斗七星の柄の部分を延長した先にある、オレンジ色の星がアルクトウルス、さらに同じだけ延長したところにある白い星がスピカです。

この曲線を春の大曲線といいます、とアナウンスが続ける。へえ、とわたしは素直に感心する。夏の大三角形という言葉はおぼろげに覚えていた。あと、冬のオリオン座は見て分かる。でも、春の大曲線という言葉は初めて聞いた。

プラネタリウムなんて小学生のとき以来だ。たまに

はこういうのもいいかもしない、と思つたところまでは覚えている。新幹線の中であれだけ寝たはずなのに、わたしはいつの間にか眠りに落ちていた。

マナーモードにしていた携帯電話を見ると、何件か着信が入っていた。あらかじめ登録しておいた瀬良敏和の番号だ。慌てて天文博物館の外に出て、電話をかけなおす。せっかく早めに来たというのに、待ち合わせ時間はとつくに過ぎていた。

「すみません。プラネタリウムを見ていました」

わたしが言うと、電話の向こうで瀬良敏和は、あれ、と言った。笑いを含んだような親しみのこもつた声だつた。

「じゃあ、もう上まで来てるんですね」

「早く着いたので、タクシーで来てしました」

じやあ、博物館の前で待っていてください、と言わ
れて電話を切る。わたしは深呼吸をして、乱れていた
髪の毛を手で直した。

数分後、瀬良敏和が現れた。綿のパンツに白いポロ
シャツという格好で、すらりと足が長く、体も引き締

まっている。五十歳近いはずなのに、四十代半ばにしか見えない。につこりと笑った顔がとても優しく、研究者特有の偏屈な感じはまったくない。

瀬良敏和が魅力的な男性であつたことほつとしたと同時に、わたしは軽く失望もしていた。会つた瞬間に、彼こそが本当の父親であるという感覚が雷に打たれるように体中を駆けめぐる、とか、そんな非科学的なことを心のどこかで期待していたのに何も感じない。目の前にいるのは、感じのいい知的そうなひとりの男性研究者だ。

「あの、伊藤真理です」

言いながら、慣れない手つきで名刺を差し出す。普段は実験室にこもっているから、名刺の扱いが分からぬ。

瀬良は、ライター・伊藤真理と書かれた偽物の名刺をじっと見つめている。怪しまれているかもしれないと思って、わたしは慌てて言葉を続けた。

「このたびはお忙しい中、取材を引き受けてくださつてありがとうございました」

「こちらこそ、わざわざ岡山まで来ていただいて、す

みません」

瀬良はわたしに向かって微笑むと、名刺を胸ポケットにしまった。

「望遠鏡、もう見ました？」

「いえ、まだです」

「今は一般公開用の時間だから、ガラス越しにしか見ることができませんが、一緒に見に行きましょうか？」

瀬良が背中を見せて歩き始めたので、わたしはようやく緊張が解けて、力が抜けた。ライターであるということを信じてもらえた。いきなり追い返されなくて

よかつた。

山のてっぺんに見えていた丸い建物を目指して歩いていく。かなり急な斜面だった。日差しがきつかったけれど、風は冷たくて気持ちいい。ウグイスの声があちこちから聞こえた。

瀬良が、わたしのほうを振り向いて立ち止まつた。
「足もと気を付けて」

斜面が急だからという意味だと思つて、大丈夫です、
と元気よく答える。

「いや、そうじやなくて」

指差されて自分の足もとを見ると、そこにはうねうねと体を波打たせながら道を横切つていく派手な黄色の毛虫がいた。思わず、わ、と声が出た。よく見ると、道のあちこちに同じような毛虫がいて、右へ左へせつせと移動している。中には踏みつぶされてぺったんこになっているものもいた。

ひきつったわたしの顔を見て、瀬良敏和は笑つた。
「自然がいっぱいでしょう」

ドームの中に入ると、大きなアブやハエが窓の隅を這つていた。それらを見ないようにして薄暗い階段を

登っていく。虫は苦手だ。ひとりだつたら、こんなに虫がいる建物には絶対に足を踏み入れないだろう。でも、階段を登り切つて、巨大な望遠鏡を目にした途端、わたしは虫のことなんて忘れてしまつた。それは望遠鏡と聞いて想像する形とはまるで違つていた。天に向けられた青い筒は、巨大な記念碑のように見えた。

「もうこの望遠鏡も五十歳を越えてますから、最前線というわけにはいきませんが。まだまだ現役です」と、瀬良は言つた。

「観測の時にはドームが開きます。外から見たら丸い

屋根みたいになつてたあの部分ごと、ぐりぐりと回転して、夜空のどの方向を見るかを決めるんです」

わたしがいつまでも望遠鏡に見とれていると、写真撮らないんですか？」と、瀬良が言つた。わたしははつとして、デジタルカメラを取り出す。

「あと、メモとか追いつかなかつたら遠慮なく話を止めてください」

そうだ、取材なのだからメモを取らなくては」と、わたしは慌てる。

「あ、じゃあ、録音させてもらつていいいですか？」

「構いませんよ」

買ったばかりのＩＣレコーダーを取り出して、録音スイッチを入れ、カバンのポケットにしまう。これで取材の格好はつく。

「すみません。まだ新米ライターで、慣れていないんです」

わたしは下手な言い訳をした。

「じゃあ、前は別のお仕事をされていたんですか？」

「研究開発の仕事をしていましたが、先月辞めました」とつさに、本当のこと言ってしまった。

「研究って、何の分野ですか？」

「物性化学です」

「そう。じゃあ、物理用語を使っても問題ないですね」

瀬良は波長の違いによる観測方法について説明を始めた。楽しそうに研究内容を話し続ける「父」を見ていると、わたしはだんだんさみしくなってきた。こんなふうに自分の好きなことを職業としてやり続けられたら、どんなに幸せだろう。もともとわたしは獣医になりたかった。でも、第一志望の獣医学科に落ちてしまい、物理が得意だったから、とりあえず後期試験で

理学部物理学科に入学した。そこで仮面浪人をして獣医を目指すつもりだつたけれど、物理の勉強が思いのほか楽しく、夢中になつた。それで院に進み、企業で研究開発の職を得た。でも、その仕事も結婚をするために辞めてしまい、その結婚相手には逃げられた。何もかもが中途半端だった。中途半端なだけじやない。今のわたしには何も残つていなかつた。

もし、瀬良が母と別れなかつたら、わたしは、この父のもとでどんな人間に育つていただろうか。そんなことを考えても意味がないことは分かつているのに、

目の前にいるもう一人の父を見ていると、妄想が止まらなくなつた。

わたしが一緒にいたら、瀬良は今のように研究を続けられていただろうか。子供がいたら、自由に海外に移動できないし、収入面を考えて就職先の選択肢は狭まってしまうかもしれない。会う前に、わたしは天文学者について少し調べた。物理系の院に進んだから、知り合いの知り合いをたどつていけば、天文学を専攻している人間にコンタクトを取ることはできる。電波望遠鏡のような、昼でも観測できる研究もあるが、こ

の岡山天文台にあるような光学望遠鏡では夜の観測がメインになる。いったん観測が始まれば昼夜逆転の生活になり、何日も観測所に泊まりこむことになるらしい。きっとその間は地上のことなど忘れているだろう。さみしがりやの母はそんな結婚生活には耐えられないだろう。

「研究内容よりも、人物に焦点を当てた企画ということがでしたつけ？」

建物の外に出ると、瀬良がたずねた。わたしは自分が出した取材依頼メールを思い出しながら、うなづく。

「岡山は初めてですか？」

唐突な質問だった。はい、と答えると、

「せっかくだから、僕の好きな場所に案内します。日
が暮れる前に行きましょう」

「いいんですか？」

思わず提案に、わたしの心は浮き立つた。

「研究所の中を案内してもいいんですけど、研究開
発の仕事をされていたんだつたら、研究室がどんな感
じかはもうご存知でしょう？　夜間観測の人たちが寝
ているからあまり大きな声は出せないし、外に出たほ

うがいろいろと話しやすいかもしません」

車回してきますので、下で待っていてください、と瀬良は言つて、研究所の方へ歩いていった。わたしは、足もとの毛虫を避けながら、ひとりでゆっくりと坂を下つていった。

初めて本当の父の存在を知つた十七歳のとき、インターネットというものは、よほどのコンピューターオタクでない限り、触れたこともないというのが普通だった。でも、時代は変わつた。インターネットで検索

してみることを思いついたのは、大学院生のときだつた。

天文学者、瀬良敏和と入力して検索すると、あつさりとそれらしき人物が検索結果に出てきた。研究者としての詳細なプロフィールも載っている。それを見る
と、東京の大学院を出て研究員として岡山の国立天文台に所属し、そのあとアメリカに留学して、ハワイの天文台に在籍し、それから数年前にこちらに戻ってきて、ふたたび岡山の国立天文台所属の研究者となつているということが分かった。

わたしはとても混乱した。海外にて連絡を取ることもできないと思つていた本当の父が、こんなにもあつさり見つかってしまった。研究所に電話をかけることもできるし、会いに行くこともできる。アドレスも載っているから、メールを出すことができる。連絡を取れるということは、わたしは父に会うか会わないか選択できるということだ。

そのときは会わないという選択をした。でも、それ以来、わたしの心の一部は常に岡山にあって、何か重大な忘れ物をしてしまったような気持だった。いつか

取りに行かなくてはいけない。そう思っていた。

その「いつか」は、婚約者に逃げられたとき訪れた。婚姻届を出す予定にしていた二日前に連絡が取れなくなつた。あとで知つたことだけど、そいつは二股をかけていて、相手の女の子が妊娠したことが発覚して、わたしと結婚するのをやめて姿をくらましたらしかつた。大学を卒業して以来、ずっと遠距離で付き合つてきたから、結婚を機に一緒に暮らすつもりだつた。仕事をやめ、結婚相手を失つたわたしのもとに残つたのは、婚姻届に添えて出す予定だつた一枚の戸籍謄本

だけだった。

何もやる気が起きなくなつた。その中で唯一、思いついた行動が、本当の父親に会いに行くということだった。ただし、娘だとは名乗らず、名前を偽つて、取材という名目で。

「そんな面倒くさいことしないで、あなたの娘ですつて会いにいけばいいじやん」

高校時代からずっと縁が続いている真由は、わたしの案を聞くと、きっぱりと否定した。わたしが黙ると、言い過ぎたと思ったのか、

「まあ、いろいろ家庭の事情というものがあるんだろ
うけれど」

と、付け加えた。わたしはますます返す言葉がなく
なつてしまつた。いろいろな家庭の事情なんてなかつ
た。父も母も、もう大人なのだから会うか会わないか
は真珠が判断したらしいと言つていたし、そもそも母
は瀬良敏和に娘と会うことを禁止したわけではなかつ
た。会えない事情があるとしたら、向こうの方だ。だ
からわたしは娘だと名乗るのが怖かつた。名乗つたせ
いで会うのを拒絶されたら、もう、手詰まりだ。自分

の父親がどういう人なのかを知るチャンスがなくなる。

「取材依頼メールの下書き見てくれた？」

真由の職業は編集者だ。わたしが「取材」という手段を思いついたのは、真由の影響だ。

「ああ、あれ？ 全然ダメだつた」

一生懸命書いたのに、ひどい言いようだ。

「まず、天文学者を取材したいっていう理由だつたら、わざわざ岡山まで来なくとも東京の研究者を紹介しますって言われるのがオチでしよう？ なぜ、その人じやないと駄目なのかつてことが分かるように書かなく

ちや。あと、嘘の出版社や雑誌名を出すのもアウト。

今はネットで何でも調べられるんだから。フリーランスでライターをやっていて、持ち込みの記事で、まだ企画段階で形になるかどうか分からぬ、くらいに書いておけば、実際に記事にならなくても言い訳はつくでしょう。あと、真珠が知りたいのは研究内容じやなくて、お父さんの人生のことなんだから、天文学について知りたいなんて書いたら、延々と研究の話をされ、下手したら、ほかの研究者の話も聞いてみたらつて、あちこち連れまわされるかもよ。人物に焦点を当

てたドキュメントを作りたいって説明したほうがいいと思う」

確かに、とわたしはうなつた。さすがプロは違う。

「あと、国立天文台って国の機関でしよう？ 取材するなら許可がいるかもしれないし、そうなると面倒だから、もし差支えがあれば名前を出さないファイクション形式のドラマにするとか、実在の名前や機関を出すときは、事前に必ず記事をチェックしてもらつて勝手なことは書かないなんて約束すると、取材に応じてくれやすいかも」

なるほど、と言つて、わたしはさらにうなつた。

「で、どう書けばいいの？」

「もういい。説明するの面倒くさいから、わたしが書く」

しびれを切らして、真由はそう宣言した。

「それより、大丈夫？」

何が、と答えたけれど、真由が婚約破棄の件について言つていることは分かつていた。

「真珠さ、慰謝料請求できるよ」

「相手がお金持つてなければ請求できないよ。わたし

知らなかつたんだけど、あいつ、借金抱えていたみた
い」

「最悪。ほんと、結婚しなくてよかつたね」
たとえ請求できるとしても、争う気力がなかつた。
何年も付き合つて信頼していた男がそんな人間だつた
ことと、自分がそれを見抜けなかつたことに失望して
いた。

「しかし、やつぱり真珠はクールだね」

と、真由は言つた。

「そうかな。一応落ち込んでいるんだけど」

控えめに反論したけれど、わたしなら包丁持つて相手の実家に押しかけるね、という真由の言葉に苦笑いした。真由に比べたら誰だってクールな部類に入るだろう。

電話を切つて一時間も経たないうちに、真由から完璧な取材依頼メールの見本が届いた。わたしは伊藤真理という仮名を使って、瀬良にメールを出した。

瀬良からの返事はすぐに来た。取材を受けていいという文を見て、あまりにもあっさりと進んでいくことが恐ろしくなった。でも、ここまで来たら途中でやめ

るわけにはいかない。何度かメールのやりとりをして、取材に行く日を決め、わたしはライター・伊藤真理という名刺を作つて、この岡山にやつてきた。

そして今、瀬良の運転する車の助手席に座っている。運転しながら、瀬良は、いろいろな話をしてくれた。

ハワイにいた時の話、岡山で過ごした思い出、アメリカで出会った困った教授の話。車で一時間ほど走ると、鷲羽山という看板が見えた。

「わしはねやま？」

わたしが尋ねると、

「わしゅうざん」

と、瀬良は言つた。どこかで聞いたことがあるような地名だつた。ここから山道になるから、酔わないよう気を付けて、と瀬良は言つた。でも、カーブの多い山道も、不思議と氣分が悪くならなかつた。瀬良の運転がうまいのかもしれない。あつという間に目的地に到着した。

「あれを登つたところに展望台があるから」

広々とした駐車場の先に長い階段があつた。今日は登らせてばかりだけど、と瀬良は笑う。日頃の運動不

足を見破られないよう、わたしは息が切れるのを我慢して階段を登つっていく。登り切つたら、目の前に半透明の布を広げたような海が広がっていた。瀬戸内の海は穏やかだと話に聞いたことはあつたけれど、こんな静かで美しい海を初めて見た。湖のような、透明のゼリーのような水面だつた。その中に緑の島々が顔を出し、船がゆつくりと横切つていく。船が進んだあとに柔らかなしわが寄り、広がつて消えていく。優しいという言葉が一番ぴつたりとくる穏やかで美しい光景だつた。

「あの橋が瀬戸大橋ですか？」

島と島を結んでいる白くて優雅な橋を指さしてたずねると、瀬良はうなずいた。橋の先に見えているのは四国だつた。

「ここからの眺めも充分きれいだけど、あと十分ほど歩けば山頂にも行けますよ。三六〇度、すべての景色を見渡すことができますけど、どうしますか？」

「絶対に行きます」

力強く答えたたら、瀬良が苦笑した。息が切れても、筋肉痛になつても、そんな素敵な場所があるのならぜ

ひとも行きたかった。

坂を上つていく。木々の間からさつきの場所からは見えなかつた島々が見えた。乱れた息を隠していたつもりだつたのに、結構しんどいでしょう、と瀬良に言われた。

「そんなことないです」

と、わたしは強がる。瀬良のほうは毎日展望台に続く道を行き来しているからだろうか。軽い足取りで歩いていく。道を上がっていくと、最後にこぢんまりとした岩山が見えてきた。

「この上です」

まずは瀬良が手本を見せるように、よじのぼった。差し伸べられた手を握るのが恥ずかしくて、ひとりで大丈夫です、と答える。足場に注意しながら、岩によじのぼる。

体を引き上げたとたん、絶景が目の前に広がつっていた。橋も海も島も海岸沿いの家々もすべて見える。傾きかけた夕日がきらきらと水面を光らせて、空がピンク色に染まっていた。その光景に、わたしはすっかり心を奪われてしまつた。

黙つて見とれているわたしの隣で、瀬良も黙つていた。わたしはもう最初の目的も、自分がライターで取材だと偽つていたこともどうでもよくなっていた。この景色をこの人と一緒に見たことを、一生覚えていようと思った。それだけで十分だつた。

「プラネタリウムを見たのなら、春の星座の見つけ方を解説してたでしよう？」

瀬良は岩に腰をかけて夕暮れの空を見上げていた。

「北斗七星があつて、その柄を伸ばした先にアルクトウルスとスピカがあるってやつ」

「はい、見ました」

わたしは、自信を持つて答えた。その部分だけは眠らずにしつかりと見ていたから、よく覚えている。

「あれ、便利だから覚えていてください。ちなみに今、スピカはあの辺りにあります」

瀬良は夕日と反対側の海に近い位置を指さした。見えるのだろうか、と目を凝らしたら、見えませんよ、と瀬良は笑った。

「今の季節、夜になつたら見えます。たぶん、明るい星だから、東京でも見えるでしょう」

夕日を背にして、瀬良は空を見上げていた。斜めに差す日が彼の顔に陰翳をつけて、最初に会った時よりも年を取つて見えた。でも、穏やかで優しい顔だった。

「僕は自分の娘が生まれた瞬間、岡山の天文台にいました。どうしてもやらなくてはいけない観測があつて、病院に駆けつけることはできなかつた。でも電話で生まれたという知らせを聞いて嬉しくなつて、外に飛び出した。そのとき見た夜空は人生で一番きれいだつた。降るような星空だつた。その中で、スピカが白く気高い光を発して輝いていた。その光景は今でも忘れられ

ません。スピカの和名は真珠星といいます。あなたの名前はそこから取りました」

わたしは言葉を失つたまま、瀬良敏和を見つめた。「名前は違つたけれど、メールアドレスに shinju という語が入つていたから、もしかしてと思ったんです。

いや、もしかしてというよりも、このメールがあなただつたらいいなと思いました。別人がやつてきて、がつかりさせられてもいい。可能性があるのなら会おうと思つた。そして、今日、一目見て、自分の娘だと確信しました」

ここ、よく来ていたんですよ、と瀬良は言つて立ち上がつた。

「まだ幼かつたから、覚えてなくて当然です。小さかつたあなたは、何回来ても、この山頂にのぼりたがりました。そしてこの岩に座つて、いつまでも景色を眺めていた。もう行こうと言つても、もう少しと言い張つて、びくとも動かなかつた。今日のあなたを見ていたら、昨日のことのように思い出しました。二十年以上経つても、同じ行動をするんだと思つて、おかしかつた」

目の前にいる瀬良敏和が、わたしの知らないわたしの話をするのを聞いて、涙があふれて止まらなくなつた。悲しいのか、つらいのか、嬉しいのか分からなかつた。さみしいのかもしれない、と思つた。決して取り戻せない時間があることを知つてしまつたことが、さみしいのかもしれなかつた。

「スピカは春の星座を構成する星ですが、一年中、どこかの時間にどこかの空にいます。ほかの季節は太陽があるから見えないだけなんです。僕はどんな場所にいても、どんな季節でも、スピカの位置は分かります。

スピカを見てはあなたのことを思い出していたつもりだつた。でも、それは間違つていた。今、目の前にいるあなたと、僕の記憶の中にいる真珠の間にあつた時間は二度と取り戻すことはできない。そのことを、僕は一生悔やむかもしれない」

一度だけ、母が、わたしと瀬良敏和が似ていると言つたことがある。本当の父親を知つてもまるで取り乱さなかつた真珠を見ていたら、何だか、あの人の思い出した。真珠のドライなところ、あの人にそつくりだと。

母の言わんとしていることはよく分かつた。この人
とわたしはよく似ていてる。似ていてるから、よく分かる。
ドライでもクールなわけでもない。臆病なのだ。自分
のせいで誰かが迷惑がかかるのが怖くて、自分の感情
をぶつけて拒絶されるくらいなら、自分から去ったほ
うがいい。そんなふうに生きてきた。

「会いに来てくれてありがとう」

わたしは目をつむった。今まで感じたことのない穏
やかで安心した気持だった。それはわたしの体の記憶
だつた。わたしの体は覚えている。この土地も、わた

しとよく似たこの人と過ごした時間のことも。

＼ 了 ＼